

U STAMBOIU BŢI - OSTAO JE MIT



COLUMN

鎌倉の猫事情 第三十一話

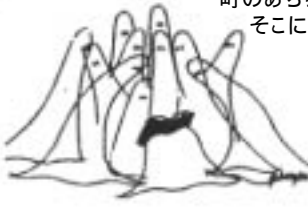
彼らの初めての出会いはいつの事だったのでしょうか？  
 今となってはそれはもう遠い昔の出来事だったような気がします。  
 すっかり裏路地の『顔』となった灰色猫は、町に出現した頃、ミルクホールから100メートルばかり先の泌尿器科の玄関先を拠点としてかまえていました。  
 グーニー君の方は、まだ小さいという理由でしばらくは外へは出してもらえなかった頃です。小さい頃はからきし度胸のない猫で、2階の住処から下へ降りる階段になかなか踏み出す勇気がありませんでした。小さな階段ですから、グーニー君の目から見ると真っ暗で真っ逆さままで底知れなく思えたのでしょう。私が階段を上がっていくと2階から黒い小さな二つの耳がこちらを恐々と覗きこんでいました。もともと猫は身が軽いのが商売みたいなのですが、うっかりしてころころ下まで転がり落ちると、打ち所が悪く大怪我することもありますから危なくなくていいんですけどね。弱虫猫のグーニー君、こんな臆病な子猫が表へ出て何かあったら大変と、簡単には外出させてもらえませんが、意を決して脱走を試みるのですが、苦勞して表の塀まで辿り付いても、すぐ気づかれて店の従業員達に包囲され、戻されました。やられっぱなしの俺様ではないとばかりに、誰彼構わず噛み付いてましたから、グーニー君と店の人たちは、随分と気まずい関係になったものです。そんな事を繰り返す、ついに周りをあきさせ、段々と成長し、自らの自由を獲得していったのです。  
 一方灰色猫の方では、泌尿器科の玄関先地点から徐々にじつりとに縄張りを広げつつありました。  
 最初はキンモクセイの木の下に必ずいたのが、日によって陣取る場所が少しずつ変わっていったのです。  
 自由の身になったグーニー君の方ではその灰色猫のいる路地とは反対側の方へよく探索しに行っていました。ただ時々私の後を追いかけて、泌尿器科の角までついてきましたから、そこまでが自分の領分だったのでしょか。そして、いつの間にか時々灰色猫がミルクホールの路地に顔を出しはじめるようになっていました。不敵な顔でのし歩く灰色猫の姿には周りを威嚇する意図が見られます。そうしてどんどん彼らのラインが交差していったのだと思われまふ。こちらは無防備なグーニー君、幼くとも妻と子供がいます。泌尿器科の周りには寝そべると冷たくて気持ちのいいコンクリートの広々した床があるのを気に入ったようで、時折家族総出でその場所にくつろぎに行っていました。駅からの帰り道など、泌尿器科の前でうちの猫達がだらしく寝転がってるのを見て恥ずかしくなったものでした。それにしても、そこはあの恐ろしい灰色猫の根城の鼻先なのです。  
 彼はグーニー一家が自分の領分を侵してくつろぐ姿を、きつとどこからか、苦々しく見つめていた事でしょう。



RUIN

廃墟の夜

霧が晴れていく気配に、少女は目を覚ました。  
 体に巻きつけた薄汚れた灰色の毛布をはねのけてソファから飛び降り、暗闇の中でうすうすと明かりの差しこむ窓のところへ行き、少し背伸びをして回転窓を持ち上げ暗い夜空を見上げた。  
 『やっぱり晴れてきたわ。月が見えてる…』  
 何日も幾晩も霧雨と白いもやに覆われていた月が、霧が晴れてきた夜空の真ん中で白くぼんやりと光っている。しばらくすればすっかり霧が晴れるだろう。少女は寝巻き代わりに着ていた白い大きな上っ張りを脱ぎ捨て、細い膝下までのズボンと、少し窮屈過ぎる上着に着替えた。  
 そして窓の下に立てかけた梯子によじ登り、半分開いた窓の隙間から地上へと瘦せた体を押し出した。  
 今出てきた細長い窓は月明かりの中に照らされている。  
 少女はすばやく立ちあがると窓を閉めて用心深くあたりを見渡した。  
 この、崩れて全体の半分が地下に埋まってしまい、1階のほとんどが地下室のようになったビルが彼女の隠れ家である。  
 隠れ家というばかりでなく、ひとりぼっちの彼女の懐かしい思い出が詰まった大切な『ホーム』でもある。  
 もともと地上6階まであった建物が今ではせいぜい3階分の高さしかない。少女は今は廃墟となったこのビルを知り尽くしている。  
 もともと1階部分だったこの住みかも半分は瓦礫に埋まっていたのを一人苦勞してきれいに四角い部屋に仕上げた。  
 くずれたビルのあちこちを探検して周って見たけれど、安全といえるのはこの部屋と、2階部分へ抜ける階段と、そして、もともと3階部分だった少し大きめの部屋がうまい具合に水平を保たれて使えるのだ。彼女はいつか適当な人間を見つけてその部屋に住まわせてやろうと考えている。この崩れた建物をひとしきり見て周った少女は、何か重要な探しものをする時以外、今はもう危険な個所には立ち入ることはない。  
 以前、床の抜けた4階部分にうっかり足を踏み入れて転落しかけた事があった。月明かりに照らされた少女は、細い棒のような両足を踏みしめ、真っ直ぐ立って胸を張り、獣のように鋭く耳をすませた。  
 何の物音もなかった。もう一度注意深く周囲を確認すると、細長い窓に古い板きれを立てかけて彼女の出てきた所を隠した。  
 空は上空の方から霧が晴れてきている。もやった夜空の真ん中の高い所だけが黒く晴れて、満月より少し欠けた月が楕円形に白く浮かんでいた。こういう月の晩には、彼女の秘められた力がいつそう張り切りだし、不思議に体が宙へと浮揚する感じがする。  
 少女は力強く瓦礫の山を蹴って夜の闇に包まれた町へと飛び出した。



町のあちこちらにうずたかく積まれたゴミの山。そこには仲間の子供達が集まっているにちがいない。ちゃんと家のある子ですら、ゴミの山に集まってくるのが、少女にはおかしかった。今夜は月の明るい特別な晩だ。子供達が少女の現われるのを心待ちにしていることだろう。少女は小さな仲間達の顔を思い浮かべ、夜の町へと高く高く飛んでいった。



to be continued